

『武士道』ギリシア語版刊行さる

新渡戸稲造 著 / ヴィロン・ポリドラス 訳

「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。それは古代の徳が乾からびた標本となって、我が国の歴史の腊葉中に保存せられているのではない。それは今なお我々の間における力と美との活ける対象である」ーの書き出しで有名な『武士道ー日本の魂ー日本思想の解明』（1899）は、新渡戸稲造が38歳の時に米国フィラデルフィアにて出版された。

その目的は欧米の人びとに日本人の道德観のあり処を伝えることにあった。ゆえに原書は荘重なる英語で書かれた。序にいわく「私は、私の正邪善悪の観念を形成している各種の要素の分析を始めてから、これらの観念を私の鼻腔に吹きこんだものは武士道であることをようやく見いだしたのである」と。

翌年日本語訳が出版され、約5年間に10版を重ねる。一方海外ではニューヨークとロンドンでの同時発行に続き、独語、ボヘミア語、ポーランド語、ノルウェー語、露語、仏語、中国語などに翻訳された。

けれども、今や日本人の大部分を占める戦後生まれの人びとにとって「武士道」とは、いかにも古くさく、封建時代の遺物のように思われるのではないだろうか。それが、21世紀を目前に控えた1995年、遠くギリシアの地で、48歳の現役政治家によって翻訳出版され、すでに5版を重ねているという。少なからぬ驚きである。

「日本の魂」への共感

訳者のヴィロン・ポリドラス (Vyron Polydoras) 氏は、1947年、ギリシアのオリンピア生まれ。アテネ大学で法律を学び、米国の大学で政治学の博士号取得。現在はギリシア政府のスポークスマンであり、最大野党・新民主主義党の国会議員である。1993年には外務次官として来日し、小和田外務次官と会談している。

ポリドラス氏は大学院時代、日本人の友人を2人得た。彼らより得た日本に関する知識は、カミカゼ、広島と長崎（被爆）、皇居前の集団自決（ハラキリ）、黒沢映画の『七人の侍』。後に、日本に息長く続く儒教思想、鎖国、日清日露戦争、真珠湾、無条件降伏と天皇の人間宣言、戦後の驚異的な経済発展などであり、それらの中に「サムライの厳粛さと自己修養のイメージ」を感じたという。

日本のサムライに興味をもった氏は、関連書物を殆んど読破したが、当初は、自国ギリシアの文

化や広義の西欧文明とは対局にあるものと考えていた。

やがて武士道の源流のひとつである儒家の孔子は、ギリシア哲学の祖・ソクラテスと同時代人であること、ソクラテスが「自由を、然らずんば、死を」と叫んで自ら毒杯を仰いだ史実や、アイアスの悲劇（*）などに、共通項を見いだす。三島由紀夫の自衛隊襲撃割腹事件（1970）に関しても、ギリシアにおいて同様の自決事件（**）があったことを思う。両者は地理的にも歴史的にも差異をもちながら、失われた伝統的戒律への服従という点においてつながっていると見たのである。

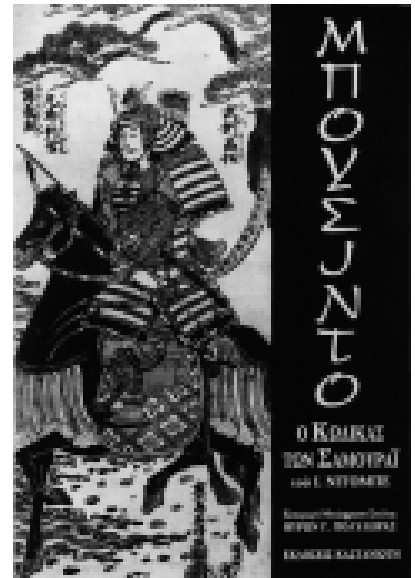
このように「日本の魂への共感を発酵させ」ていたポリドラス氏と、新渡戸稲造著『武士道ー日本の魂』との出会いは、95年初頭のことであった。「初めて読んで驚いた。それ自体が啓示だった。新渡戸は明快で簡潔な方法で私の疑問に答えてくれたと感じた」のである。

新渡戸が目指したもの

新渡戸稲造は自身がクリスチャンで、クエーカー教徒の米国人妻をもつ。彼は外交官として、第一次世界大戦後の平和会議の日本代表や国際連盟の次官もつとめ、「日本と西欧との懸け橋」になることを生涯の目的としていた。

『ミカドの肖像』で、日本についての最初の系統的な紹介者になった、W・E・グリフィスは『武士道』の緒言の中で、「新渡戸博士は達筆を揮って描き、一千年の日本文学が輝かしくも反映しているところの絵画の色彩を再現した。（略）その同胞たる幾百万の高潔な人びとの踏みし途を飾りたる精華をば巧妙に記述しているのである」「武士道についてのこの小著作は、この世紀の最大問題、すなわち東洋と西洋との調和と一致の解決に対する著しき寄与である」と述べている。

しかし、ポリドラス氏が真に驚いたことは、新渡戸が西欧思想を深く正しく理解し、その真髄を取り出して、武士道のそれと比較し符号させていることであった。例えば、武士道の「勇・敢為堅忍の精神」を定義して「勇とは義しき事をなすことなり」（『論語』より）と述べた後、「危険を冒し一命を殆くする猪突的行為はシェイクスピアが『勇氣の私生児』と言えるもの」「勇氣とは恐るべきものと恐るべからざるものとを識別することなり（プラトン）、更に水戸の義公の『戦場に駆け入りて討



『武士道』ギリシア語版

ち死にするはいとやすき業にていかなる無下の者にてもなしえらるべし。生くべき時は生き死すべき時にのみ死するを真の勇とはいうなり」をあげるといように。

氏は「幾千年という歴史の実験室の中で、戦争、平和、啓蒙と暗黒時代は繰り返されているが、自由と正義、誠実、勇氣と寛容、義務や恥の感覚、愛国心、忠誠心、そして名誉心などは、どんな民族や社会、時代においても、“自動的に”存在したことは決してない。ただ試され証しされるだけなのである。『武士道』はそのことを思いおこさせる」と語っている。

我われは何ものか

『武士道ー日本の魂』に散りばめられている名言を読んで、恐らく多くの日本人は（団塊ジュニアでさえ？）懐かしさと哀歎を感じるだろう。ちょうど散りゆく桜花を眺めるように。

21世紀を目前にして、道德観、倫理観の混乱は深まる一方である。100年前に熱烈に求められた「東洋と西洋との調和」はどのようになされたか。結果として一方的な支配と混迷を生んではないか。

我々は何ものなのか、そして何処に行こうとしているのか。このことを考えるとき、諸外国の智慧を学ぶことと同時に、我われ自身の姿をよく吟味してみることも必要なことだ。西欧思想源の地ギリシアでなされた労作に敬意を表したい。

『武士道』緒言にいわく、「比較こそ学問と教養の生命ではないか。言語、道德、宗教、礼儀作法の研究において、『一つしか知らぬ者は一つをも知らぬ』と言われるのは真理ではないか」。

*

ソフォクレスの悲劇三部作の一つ。トロイ戦争の英雄アイアスは、アキレスの鎧をオデッセウスと争って失敗し、恥辱のために自殺した。

**

1910年、ペリクレス・ヤノボロスは芸術表現のギリシア系統を復活させることができず馬上で自決した。